

はじめに

1998年以来わが国では年間自殺者数が3万人を超え、深刻な社会問題となっています。この数は交通事故死者数の5倍以上にもものほります。なかでも高い自殺率を示している働きざかりの人やお年寄りの自殺に社会の関心が向けられてきました。

しかし、子どもの自殺予防に対する関心はかならずしも高いとは言えないのが現実です。いじめに関連した自殺が生じると、一挙に子どもの自殺が注目されます。ところが、その後も長年にわたってご遺族や他の子どもたちの心の傷が残るのとは対照的に、短期間のうちに社会の関心は薄らいでしまいがちです。

当然のことですが、青少年期の心の健康は、その後の人生の基礎となる重要な課題です。未成年の自殺が全体に占める割合が比較的小さい（2%以下）からといって、軽視してよい問題ではありません。わが国では子どもの自殺を取り扱くと、かえって「寝ている子を起こすのではないか」といった不安が今でも強く残っています。しかし、これは大人の側にある不安を表しているだけかもしれません。今こそ、子どもの自殺予防に真剣に取り組むべき時が来ているのです。

たしかに、時にはいじめが唯一の原因となって生じる自殺もあり、そのような場合には慎重かつ徹底的に事実関係を調べる必要があります。

しかし、同時に、子どもの自殺の多くはさまざまな原因からなる複雑な現象であることを忘れてはなりません。子どもが経験しているストレス、心の病、家庭的な背景、独特の性格傾向、衝動性などといった背景を探ってこそ、自殺の実態に迫ることができますし、予防にもつながります。

そして、子どもの自殺予防のためには、単独の努力では十分な成果が上がりません。家庭、地域、学校、関係機関の協力が欠かせないのです。

このマニュアルは、学校の現場で日々、子どもたちに接している教師の皆さんに向けたものです。自殺予防に関してぜひとも知っておいていただきたい基礎知識を中心にまとめました。関心のある方は、さらに関連の本を読んだり、研修会に参加したりして、知識や経験を深めていってください。現場で実際に生じた事例について学校全体で検討することも重要です。

自殺は「孤立の病」とも呼ばれています。子どもが発している救いを求める叫びに気づいて、周囲との絆を回復することこそが、自殺予防につながります。自殺が現実起きてしまう前に子どもはかならず「助けて！」という必死の叫びを発しています。学校で毎日のように子どもに接している教師の皆さんこそが、この叫びを最初に受けとめるゲートキーパーでもあります。ひとりでこの問題を抱えこまずに、周囲の同僚たち、子どもの家族、医療従事者などと協力してこの危機に向きあってください。

平成21年2月

児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議